



第1展示室 特集展示

# 北の大地が 育んだ古代

オホーツク文化 と 擦文文化



北の大地が  
育んだ古代

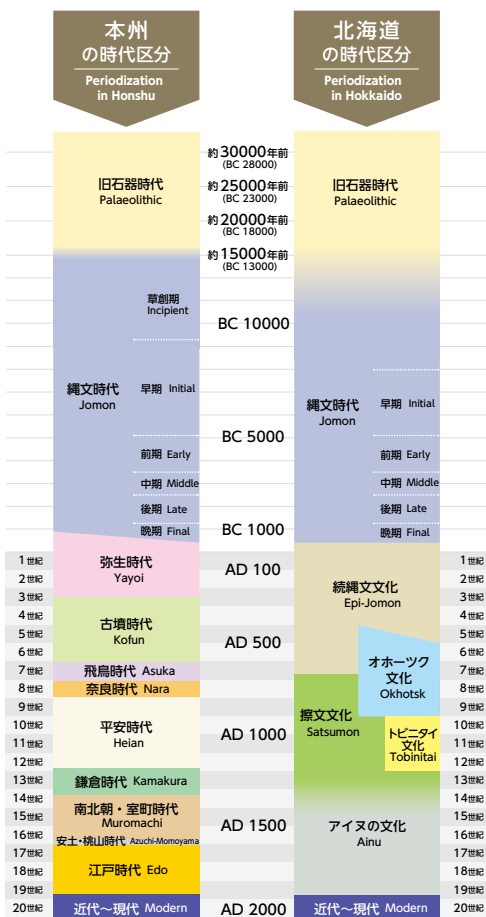
オホーツク文化 と 擦文文化

# はじめに

日本史で古代(飛鳥・奈良・平安時代)に区分される時代、北の大地、北海道ではオホーツク文化、擦文文化が展開した。オホーツク文化は5世紀にサハリンから南下した外来の文化で、海獣狩猟や動物祭祀などに特徴がある。擦文文化は本州の古代国家の影響のもと7世紀後半に成立したもので、漁労・狩猟・採集を中心に補助的に雑穀を利用し、アイヌの文化の母体となった。同じ古代であるにもかかわらず、本州においては馴染みが薄いのが現状である。

そこで、今回の特集展示では、北海道東部の北見市常呂町に拠点をおいて長年にわたって調査・研究を進めてきた東京大学常呂実習施設と、大学共同利用機関である国立歴史民俗博物館が連携して、その概要について紹介する。

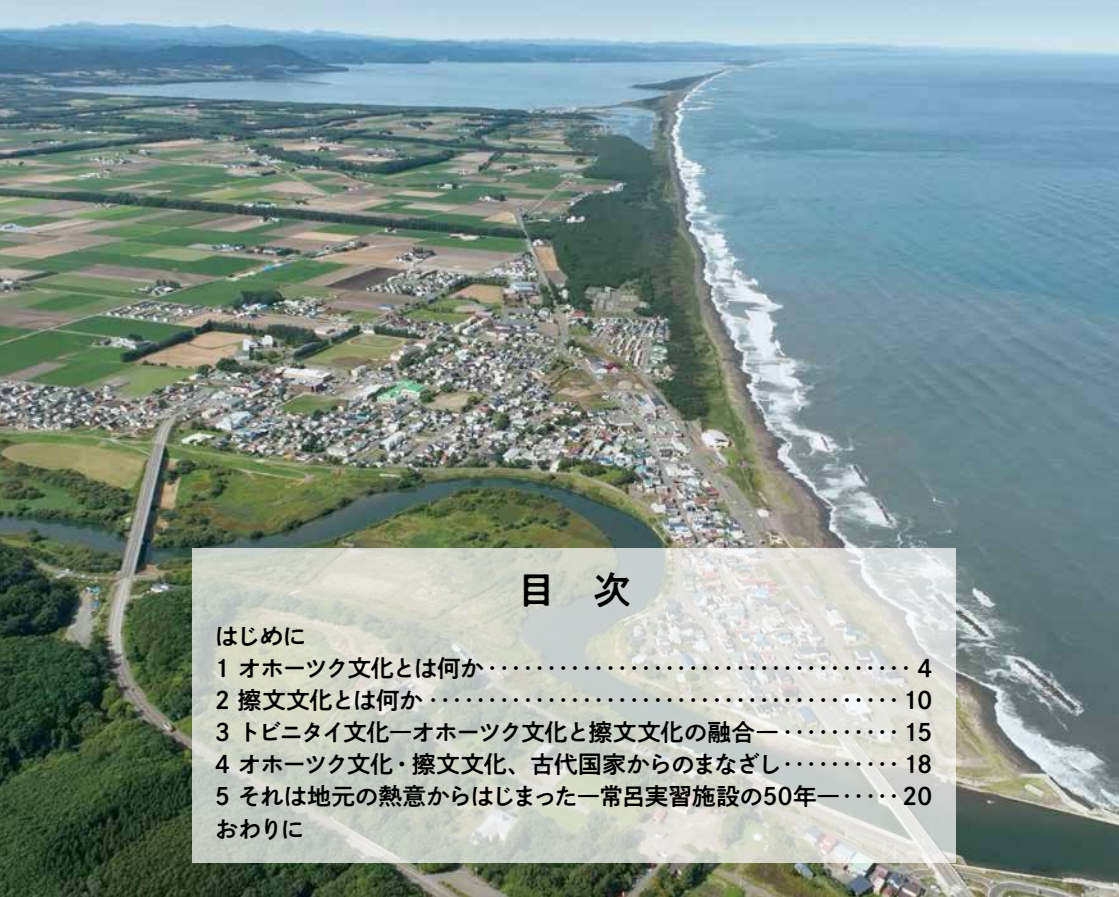
日本列島には多様な文化が展開していたこと、そして「あなたの知らない古代」に関心をもっていただければ幸いである。



In ancient Japanese history, the northern lands (Hokkaido) saw the development of the Okhotsk and Satsumon cultures. Being of foreign origin, the Okhotsk culture migrated south from Sakhalin in the 5th century, and is characterized by the hunt for marine animals and rituals involving animals. The Satsumon culture was established under the influence of the ancient states of Honshū in the late 7th century. Based on fishing, gathering, and supplemental use of millet, it became the origing of the culture of the Ainu people.

This feature exhibition, in a collaborative effort, introduces research results of the University of Tokyo's Tokoro Research Laboratory, based in Kitami-Tokoro in eastern Hokkaido, at the National Museum of Japanese History.

We hope that you will find interest in the diverse cultures that developed on the Japanese archipelago during these "unknown ancient times".



## 目次

はじめに	
1 オホーツク文化とは何か	4
2 擦文文化とは何か	10
3 トビニタイ文化ーオホーツク文化と擦文文化の融合ー	15
4 オホーツク文化・擦文文化、古代国家からのまなざし	18
5 それは地元の熱意からはじまったー常呂実習施設の50年ー	20
おわりに	

常呂川河口からサロマ湖を望む

## 凡例

- 本小冊子は国立歴史民俗博物館第1展示室特集展示「北の大地が育んだ古代ーオホーツク文化と擦文文化ー」(主催：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設 会期：2023年11月14日～2024年2月12日)の展示解説冊子である。
- 本展示は東京大学未来社会協創推進本部登録プロジェクトの一つである、東京大学文学部「人文学における国際的・地域・社会連携の推進」プログラムと人間文化研究機構国立歴史民俗博物館との連携展示である。
- 本小冊子に掲載した展示資料のキャプションは、番号 資料名 遺跡(遺構) 時期 法量 所蔵機関の順で記載した。なお、東京大学常呂実習施設が所蔵・提供のものについては、その記載を省略した。本小冊子において(参考)として掲載した資料は展示していない。
- 本小冊子は、「はじめに」と4を林部均(国立歴史民俗博物館)、1・3・5と「おわりに」を熊木俊朗(東京大学大学院人文社会系研究科)、2を太田圭(同)が執筆し、編集は林部と熊木が協議しておこなった。なお、17ページのコラムは、國木田大(北海道大学大学院文学研究院)が執筆した。英語翻訳は、アルト・ヨアヒム(人間文化研究機構)がおこなった。
- なお、本展示は国立歴史民俗博物館基幹研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化・アイヌ文化ーその成立・展開過程ー」(2022年度～2024年度)の成果の一部である。

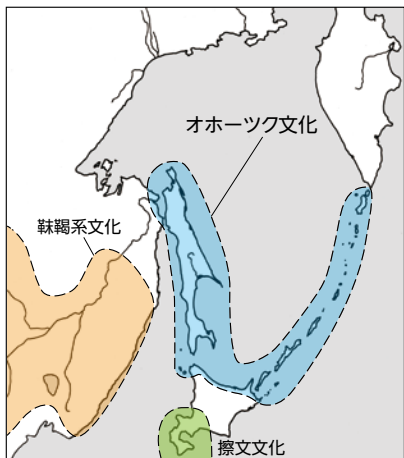
# 1 オホーツク文化とは何か

北海道では、縄文時代からアイヌの文化に至る歴史は一つの流れとしてとらえられる。一方、それとは異なる別系統の文化が北方から南下し、北海道で両者が併存した時期がある。その異なる系統の人々の文化がオホーツク文化である。

オホーツク文化は、5～12世紀(北海道では9世紀まで)の間、アムール河口部からサハリン全域、北海道のオホーツク海岸、千島列島に展開した。その過程は土器型式から前期・中期・後期の三つの時期に区分できる。もっとも分布を広げていたのは中期(7世紀頃)である。後期(8～9世紀頃)になるとオホーツク文化の中でも地域差が目立つ。今回の展示では、後期の北海道東部(道東部)に展開した貼付文系土器によって特徴づけられるグループを主に取り上げる。

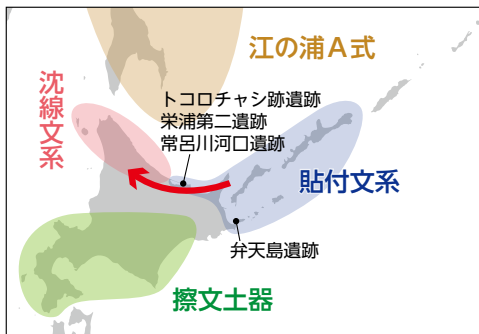
オホーツク文化には、同時期の統縄文文化・擦文文化とは大きく異なる三つの特徴がある。

一つめは、北海道からみて外来の文化となる点である。オホーツク文化の人々の骨からわかった顔かたちなどの形質を現代の東北アジア地域の人々と比較すると、ナナイ・ウリチなどのアムール下流域の人々に近いことが判明している。また、大陸の靺鞨系文化からもたらされた金属器などの大陸系製品が多く出土する点も、北方との海を越えたつながりを示すものとして注目される。



4-1 オホーツク文化中期(7世紀頃)と周辺の諸文化

この時期、擦文文化の分布は石狩低地帯より南に限られており、オホーツク文化とは「棲み分け」のような状態となっていた。



4-2 オホーツク文化後期(8～9世紀)の土器型式

後期には地域差が目立つようになる。土器の型式でみると、後期前半には北海道北部(道北部)の沈線文系土器の勢力が強いが、後半には逆に道東部の貼付文系土器の影響が道北部に及ぶ。

二つめは、海獣狩猟<sup>かいじゅうしゅりょう</sup>や漁労<sup>ぎょろう</sup>を生活の基盤とする高度な海洋適応が認められる点である。オホーツク文化の遺跡は、北海道では全て海岸部に位置し、魚類や海獣類などの海産物を利用していた痕跡が多く残る。漁労や海獣狩猟に使われた銚頭<sup>しやうづか</sup>や釣針などの狩猟具・漁労具も質・量共に多く出土しており、高い技術をもっていた。

三つめは、動物を対象とした儀礼の痕跡が目立つ点である。儀礼の存在を示すのは、竪穴住居内に設けられた動物の頭骨を積み上げた祭壇<sup>まつりか</sup>(骨塚)や、動物を表現した骨角器<sup>こつかくま</sup>などの製品である。なかでもクマは、儀礼の対象として特別視されていた。



5-1 オホーツク土器(沈線文系) 宋浦第二遺跡<sup>そうらふだいに</sup>  
8世紀 高15cm



5-2 オホーツク土器(貼付文系)  
宋浦第二遺跡  
8~9世紀 高17.8cm



5-3 オホーツク土器(貼付文系) トコロチャシ跡遺跡<sup>とくろちやし</sup>  
8~9世紀 高24cm

Between the 5th and 12th centuries (in Hokkaido until the 9th century), the Okhotsk culture stretched from the estuary of the Amur, over the entire island of Sakhalin, up to the Okhotsk coast of Hokkaido and the Kuril Islands. This feature exhibition will primarily focus on groups that developed in eastern Hokkaido between the 8th and 9th centuries.

There are three distinct characteristics to the Okhotsk culture. The first is that it, seen from a Hokkaido perspective, is a foreign culture from even further up north. The second is that it is a culture with close bonds to the sea, making fishing and the hunt for maritime animals the basis of its lifestyle. The third is that this culture has thoroughly developed rituals involving animals, particularly centering on bears.

## オホーツク文化の暮らし -集落・墓・生業-

オホーツク文化の遺跡は、全て海岸線から1km以内の地点に立地しており、海に密着した生活が営まれた。竪穴住居は大型で長さ10~15mに達する例が多く、平面形が五角形ないし六角形をなす。墓は住居に近接した位置につくられることが多く、埋葬の際は、手足を強く折り曲げた姿勢で<sup>ぼこう</sup>墓坑に安置<sup>くつそう</sup>(屈葬)し、頭の上に土器を逆さまに被せる(被甕<sup>かぶりがめ</sup>)特徴的な方法がとられる。生業では、海での漁労や海獣狩猟が盛んに行われたことが、骨角器に描かれた彫刻からも読み取れる。



6-1 竪穴住居 トコロチャシ跡遺跡 8~9世紀

長さ11.2mの五角形。床面には粘土と板張りを組み合わせた「凹」字形の<sup>くつそう</sup>貼床がつくられ、中央部には石組と木枠を用いた炉がある。奥壁部(写真下部)に、クマなどの骨を集積した骨塚がある。



6-2 墓 モヨロ貝塚 8世紀頃

屈葬の姿勢で安置され、遺体の上には被甕の土器がある。その上部にはさらに平石を敷きつめる。このような配石を伴う墓は、北海道東部を中心に分布する。



6-3 副葬品とみられるオホーツク土器 弁天島遺跡 8~9世紀

高13.9cm 根室市歴史と自然の資料館蔵・写真提供

鉄斧(9-5)と配石と見られる石が、この土器に近接して出土しており、墓の副葬品とみられる。



7-1 クジラ線刻針入れ 弁天島遺跡 5~9世紀 長7.8cm 根室市歴史と自然の資料館蔵 佐藤雅彦氏撮影 (展示品は複製・国立歴史民俗博物館蔵)  
7人乗りの船から銚をクジラに打ち込む様子が描かれている。



7-2 エイ線刻角器 栄浦第二遺跡 8~9世紀 長12.5cm  
エイと結合式の釣針が描かれている。



7-3 銚頭 トコロチャシ跡遺跡・栄浦第二遺跡 8~9世紀 長9.8~5.3cm  
左から1~3と7は先端に銚を装着して使用する。



7-4 銚頭 弁天島遺跡 8~9世紀 長9.8~8.0cm 根室市歴史と自然の資料館蔵・写真提供  
右は先端に銚を装着して使用する。



7-5 釣針軸と釣針先 トコロチャシ跡遺跡 8~9世紀 長20.6cm  
J字形の軸2本を結合し、釣針先を組み合わせる大型釣針。



7-6 掘り具 トコロチャシ跡遺跡 8~9世紀 長19.8~15.6cm  
「骨斧」とも呼ばれる、この文化に特徴的なクジラ骨製の道具。土掘り具と考えられている。



## 動物儀礼

オホーツク文化には、動物をモチーフとした製品が数多くみられる。対象となった動物は、クマが全体の約半数と最も多く、アザラシやアシカ類、クジラ類、ラッコなどの海獣類が残り4分の1を占める。ほかに鳥類や魚類、両生類や爬虫類などもみられる。竪穴住居内の骨塚でも主に祀られたのはクマであり、これを特別視する動物観・世界観が読み取れる。このような世界観については、後のアイヌの社会の重要な儀礼である「クマ送り」との関連が古くから注目されてきたが、両者を単純に結びつける議論には慎重さが求められる。



8-1 骨製クマ像 トコロチャシ跡遺跡  
8～9世紀 長5.4cm

クマの全身を表現した像。頭身の比率からすると仔グマがモデルかもしれない。



8-2 骨製ラッコ像 常呂川河口遺跡 8～9世紀  
長6.3cm 北見市とこ遺跡の森蔵・写真提供  
(展示品は複製)

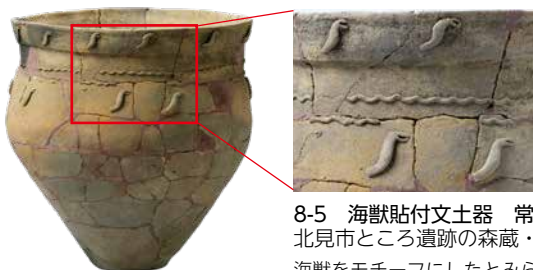
前肢を胸の前で合わせる様子や、脇の下の「ポケット」が表現されている。



8-3 土製海獣像 トコロチャシ跡遺跡  
8～9世紀 長5.6cm  
海獣の上半身と前鱗(ヒレ)が表現されている。



8-4 角製クマ像 トコロチャシ跡遺跡  
8～9世紀 高3.5cm  
クマの頭部を表現した彫像の破片。



8-5 海獣貼付文土器 常呂川河口遺跡 8～9世紀 高37cm  
北見市とこ遺跡の森蔵・写真提供  
海獣をモチーフにしたとみられる貼付文が2段めぐっている。

## 北や南との交流

オホーツク文化では、南北に接する地域と盛んに交流し、様々なものがもたらされた。サハリンを通じた北方とは、中国東北部・ロシア極東の靺鞨系文化の金属製品がよく知られており、ほかに家畜であるブタや、穀物のオオムギなども流入した。大陸系の遺物は、オホーツク文化の中期から後期前半(7~8世紀前半)のものが多く、以後は減少する。入れ替わるように後期(8~9世紀)から増加するのが、本州系の遺物である。代表的なものは刀剣類であり、ほかにも鉄斧や刀子などの鉄製品、土師器などがある。



9-1 青銅製帯飾 栄浦第二遺跡  
8世紀 長4.8cm

靺鞨系文化の製品。ベルトに装着する飾りと考えられる。



9-3 ロクロ使用の土師器 トコロチャシ跡遺跡 9世紀 高6.5cm

東北北部でつくられた。同様の土師器は、道央部や渡島半島の擦文文化の遺跡からも出土する。



9-5 鉄斧 弁天島遺跡 8~9世紀 長8.6cm 根室市歴史と自然の資料館蔵・写真提供

柄を装着するソケットが袋状を呈しており、本州系の遺物と考える。土器(6-3)と近接して出土しており、墓の副葬品とみられる。



9-2 青銅製曲手刀子 トコロチャシ跡遺跡  
8~9世紀 長15.2cm

オホーツク文化や靺鞨系文化には、茎が下方に曲がった形状の刀子がある。青銅製で靺鞨系文化の製品とみられる。



9-4 弓形角製品 トコロチャシ跡遺跡(左)・栄浦第二遺跡(中・右)  
8~9世紀 左長9cm

弓の末端の弦をかける部分の部品とみられる。本州の弥生・古墳時代の文化との関連を指摘する意見と、サハリンアイヌの民族楽器との類似性に注目する見解がある。

## 2 擦文文化とは何か

擦文文化は7世紀後半、<sup>さつもん</sup>統縄文化が東北地方北部の文化の影響のもと、石狩低地帯を中心に成立した。土師器の影響を受けた土器、方形でカマドが付く竪穴住居、<sup>ぼうすいしや</sup>紡錘車の出土、鉄器の本格的な利用という特徴をもつ。<sup>ぎやうろう</sup>漁労・<sup>しゆりやう</sup>狩猟・<sup>さいしゆう</sup>採集を中心に、補助的に雑穀を利用していた。確実な農耕の痕跡は確認されていない。

紡錘車は繊維を撚り、糸を作る道具である。本州では石製や鉄製の例が多く土製は少ない。擦文文化では土製で沈線や刺突により文様が施される例が多い。

土製の羽口や鉄滓、鍛冶用の炉が検出される遺跡もあるが、北海道南部(道南部)の一部の地域を除き、鍛冶の証拠は少ない。鉄製品の多くは、道央以南を介した東北地方北部との交易で獲得した。本州から持ち込まれた製品の代わりに、ワシなどの羽根や動物の毛皮、干鮭などの海産物といった北海道の産物が本州にもたらされた。



10-1(左) 10-2(右) 紡錘車 12世紀  
1：大島2遺跡 径6.2cm、2：トコロ貝塚 径6.4cm  
1は炭化した軸棒が残る。孔を構図の中心として沈線や刺突により三角形を意図した文様がみられる。

10-3 ふいご羽口 11世紀後半  
北見市常呂川河口遺跡 長13.0cm

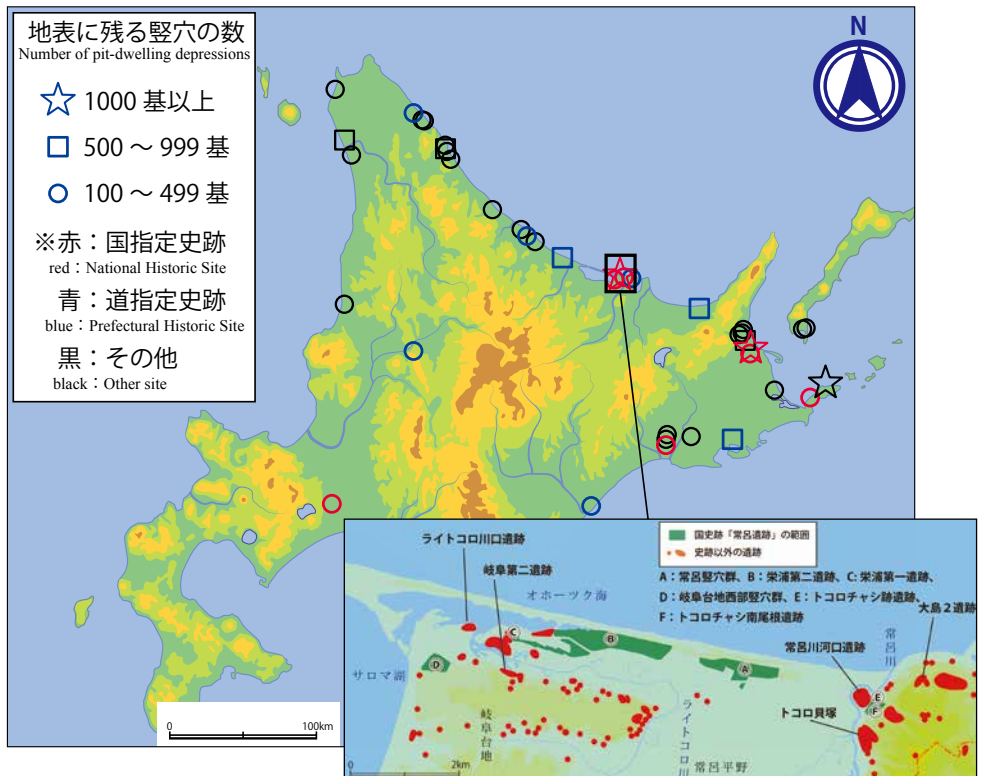
Influenced by the agrarian culture of northern Tohoku, the Epi-Jomon culture of the area surrounding the Ishikari Lowlands of Hokkaido transformed into the Satsumon culture in the 7th century (AD). Characterized by the influence of earthenware, dwellings of the Satsumon developed into square-shaped pit-houses with kamado cooking stoves, and spindle wheels and iron tools were widely used. The lifestyle of the Satsumon focused on fishing, hunting, and gathering, with supplemental use of millet. However, no reliable evidence of farming has been found yet.

A spindle wheel is a tool for twisting fibers to make yarn. On Honshū they were often made of stone or iron, and only very rarely of earthenware. The Satsumon culture, however, made wide use of clay, and items were often decorated with patterns. At some excavation sites, clay hatchets, iron slag, and blacksmithing furnaces have also been detected. But except for some areas in southern Hokkaido, there is little evidence of blacksmithing. Most of the iron goods were acquired through trade with northern Tohoku via the area south of central Hokkaido. In exchange for the products from Honshū, the Satsumon people provided feathers of eagles and other birds, as well as pelts and marine goods, such as dried salmon.

## 竪穴群の分布と立地

北日本では、竪穴住居が埋まりきらずに窪みとして確認できる。北海道では道東部・道北部の沿岸部を中心に窪み(竪穴)が集中する遺跡(竪穴群)が1300ヶ所以上確認できる。窪みの総数は2万基を超え、約6割が道東部に分布する。竪穴は縄文時代から擦文文化まで長期にわたるが、擦文文化の例が半数を占める。測量と発掘調査の結果から時代ごとの竪穴の形が明らかにされ、擦文文化の竪穴は方形と推定される。大規模な竪穴群は、道東部・道北部の沿岸部や大きな河川の河口域に集中する。擦文文化の人びとは、このような場を選び集落を形成していた。

擦文文化の竪穴群は、7～10世紀前半は道央部に集中し、時期が新しくなると日本海側にも広がる。竪穴群は、10世紀後半以降に道央部で減少する一方、オホーツク海側で増加し、道東部太平洋側にも広がる。常呂川下流域は11～12世紀頃の竪穴が多い。



11-1 大規模竪穴群と展示関連遺跡の位置

竪穴群のうち規模が大きい竪穴群の位置と規模を示した。右下は常呂川下流域の遺跡分布図。ひとつの竪穴群で竪穴の総数が100基を超える例は全体の約3%で、多くの竪穴群は30基以下の竪穴からなる。

# 擦文文化の暮らし 一擦文土器一

「擦文」は、北海道の研究者がハケメ(器面の調整痕)を擦文と呼んだことに由来する。擦文文化は、7~13世紀頃までの約600年間存続した。常呂川下流域では、オホーツク海側に遺跡が増加する11世紀~12世紀の擦文土器が多く出土する。

擦文土器の器種は甕・高坏・坏が基本で、時間とともに組み合わせが変化する。擦文土器の器形や調整は本州の土師器と共通するが、9世紀以降、沈線や刺突による文様が描かれる点で大きく異なる。



12-1 甕 <sup>栄浦第二遺跡</sup>  
11世紀後半 高27.4cm



12-2 甕 <sup>岐阜第二遺跡</sup>  
11世紀後半 高27.0cm



12-3 甕 <sup>大島2遺跡</sup>  
12世紀 高27.5cm



12-4 甕 <sup>ライトコロ川口遺跡</sup>  
12世紀後半 高29.0cm



12-5 高坏 <sup>トコロチャシ南尾根遺跡</sup>  
12世紀 高11.1cm

## 擦文文化の暮らし 一住居とカマド一

常呂川下流域の竪穴住居の基本形は、一辺が5～6m前後の長さでの方形で4本の支柱穴をもち、東側の壁にカマドを1基設置する。カマドの多くは、住居の壁を掘りぬき外にのびる長さ1m前後の煙道を持ち、礫や粘土で造られる。多くの住居では中央には炉があり、調理場のほか照明や暖房の機能もあった。

東日本の古墳時代以降の竪穴住居では、カマドは壊されて検出されることが多い。北日本ではカマドの破壊後に焚口や煙道に土器を置く行為が確認される。常呂川下流域でもカマドは壊されている例が多く、大島2遺跡ではカマドの脇に黒曜石、上に土製品を置いた例がある。カマドに対する人びとの意識は、本州から遠く離れたオホーツク海側の地でも共通していたのかもしれない。



13-1 竪穴住居 大島2遺跡(4号竪穴) 12世紀  
一辺が6.5m前後の方形で、4つの支柱穴が確認できる。写真右(南西壁)と下(北西壁)の壁際には対になるピットがL字形に並んでいる。中央には炉があり、写真上(南東壁)にはカマドを2基造り付けている。



13-2 大島2遺跡5号竪穴東カマド 12世紀  
扁平な礫を袖石としている。中央にみえる部分はカマドの天井付近の部材だろう。材のまわりを植物質まじりの粘土で固め、周縁は材を軸にした粘土で縁取られる。カマドの造られ方がわかる好例である。



13-3 カマド出土の土製品 大島2遺跡(3号竪穴) 12世紀 径4.2cm  
カマドの土器をかける天井部と推定される面の上から3つの土製品が集まって出土した。いずれも長径4.2cm程の楕円を呈する環状で、粗雑なつくりである。検出状況や土製品の状態から、カマドを廃絶した後にカマドの上に意図的に置かれたと考えられ、周辺地域では類例はみあたらない。



## 焼失住居と炭化木製品

竪穴住居は廃棄の際に意図的に火が放たれることがある。このような住居を焼失住居と呼び、本州・北海道ともに縄文時代から確認される。常呂川下流域では発掘された擦文文化の住居のうち約3割が焼けていた。擦文文化の人びとが持つ、カマドに何らかの物を配置する行為や前の時期に造られた竪穴を避けて新しい住居を構築する志向と「家を焼く」ことが関連するのかもしれない。

焼失住居からは住居の建築材が炭化した状態で検出される。住居内の柱穴などの位置とともに検討することで、住居の上屋構造を推定できる。材の樹種を同定すれば、当時の木材利用の傾向もわかる。焼失住居では、日本の土壌では残りにくい植物製の道具や動物の骨、植物の種実といった有機物が炭化して残ることがある。有機質の道具や食料残滓を分析することは、擦文文化の人びとの生活を知るうえで重要である。



14-1 大島2遺跡4号竪穴住居の炭化材検出状況 12世紀

床面直上の炭化材を検出した段階の写真である。写真下(北西壁際)の壁と直交する割材は、建築材のうち垂木と推定される。



14-2(左) 14-3(右) 焼失住居から出土した炭化した木製品 大島2遺跡 12世紀

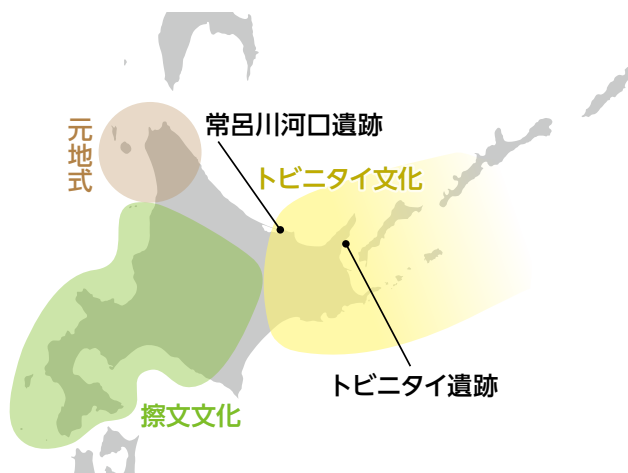
2：フォーク状木製品 2号竪穴出土 長20.7cm

3：片口付皿状木製品 4号竪穴出土 幅9.1cm(残存部のみ)

3はカマドにかけられていたと推定される横倒しの土器(甕)の内部から出土した。写真の奥側は欠損している。

### 3 トビニタイ文化 —オホーツク文化と擦文文化の融合—

オホーツク文化は、10世紀になると擦文文化の影響を強く受けて変容し取り込まれてゆく。融合の進みかたは道北部と道東部でやや異なり、道東部では「トビニタイ文化」という折衷的な文化が成立する。遺跡は沿岸部から内陸に広がり、住居内の骨塚こつづかがなくなるなど、生業や儀礼にまずは大きな変化が生じる。土器や住居でも時期を追うごとに擦文文化の影響が増大し、12世紀頃にはオホーツク文化の特徴はほとんど残らない。オホーツク文化は、200年以上の時間をかけて段階的に擦文文化と融合した。



#### 15-1 トビニタイ文化成立期 (10世紀頃)の北海道

オホーツク文化が変容し、道北部には「元地式土器」を伴う文化、道東部にはトビニタイ文化が展開する。擦文文化はこの時期前後から、急速に道北部・道東部へと分布を拡大してゆく。



#### 15-2 トビニタイ文化後半期 (11世紀頃)の北海道

擦文文化は知床半島の一部などを除く北海道のほぼ全域に分布を拡げる。トビニタイ文化も併存するが、土器や住居などの内容は、擦文文化により近づいてゆく。





16-1 トビニタイ土器 トビニタイ遺跡 10～11世紀 高33.2cm  
 羅臼町トビニタイ遺跡の土器を標式として命名された。これは「トビニタイ土器群Ⅱ」と呼ばれるこの文化の前半期の土器。



16-2 竪穴住居 常呂川河口遺跡 10～11世紀 北見市とこる遺跡の森写真提供

方形の平面形は擦文文化に近いが、石組の炉はオホーツク文化の伝統に連なり、両者の要素を折衷したものとなる。カマドや4本の太い柱穴がない点も、擦文文化とはやや異なる。



16-3 トビニタイ土器 トビニタイ遺跡 10～11世紀 高17cm  
 「トビニタイ土器群Ⅱ」。器形には擦文土器の影響が認められるが、文様はオホーツク文化の伝統上にある。



16-4 トビニタイ土器 常呂川河口遺跡 11～12世紀 高34cm 北見市とこる遺跡の森蔵・写真提供  
 トビニタイ土器群Ⅱと同Ⅰの「中間的な土器群」と呼ばれる土器。擦文土器の文様意匠を貼付文によって模倣したような文様が特徴。



16-5 (参考)トビニタイ土器 常呂川河口遺跡 11～12世紀 高34cm 北見市とこる遺跡の森写真提供  
 「トビニタイ土器群Ⅰ」と呼ばれるこの文化の後半期の土器。擦文土器とほぼ同じ意匠の沈線文が胴部に描かれる。

During the 10th century, influences from the Satsumon culture caused the Okhotsk culture to greatly change. In eastern Hokkaido the Tobinitai culture emerged on the basis of elements from both the Okhotsk and Satsumon cultures, but the influence of the Satsumon culture gradually grew, and by the 12th century the Okhotsk culture was completely absorbed into the Satsumon culture.



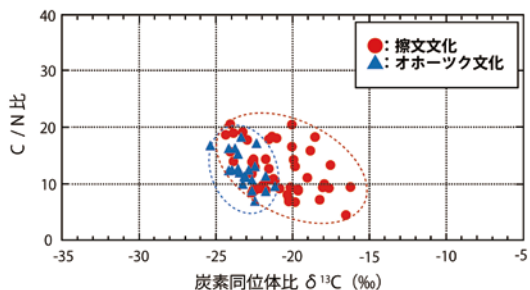
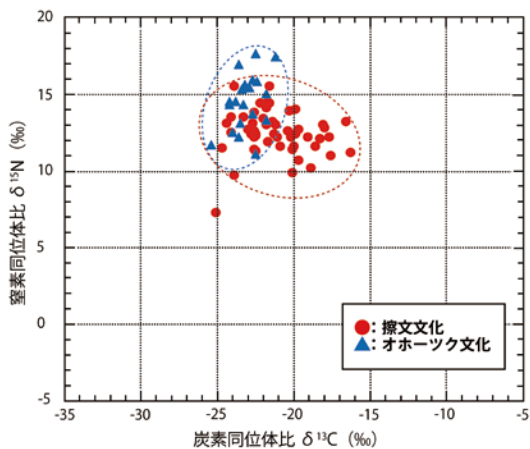
コラム

## 土器付着物から探る オホーツク文化と擦文文化の食生活

近年、新たな科学分析の進展により、土器の内面に付着したお焦げから、食べ物や推測することが可能になってきている。

土器で煮炊きされる内容物には、炭素と窒素が含まれており、その同位体比は生物種によって異なる。グラフの横軸に炭素同位体比、縦軸に窒素同位体比をプロットして結果を表示する。また、炭素と窒素の割合(C/N比)もあわせて評価することが多い。

オホーツク文化と擦文文化では、炭素・窒素同位体比がともに高い傾向を示すことから、海生生物(サケ・マス類も含む)の影響が考えられる。両文化ともに海生生物の煮炊きが中心になるが、オホーツク文化は海棲哺乳類、擦文文化はアワ・キビ等のC<sub>4</sub>植物といった内容物の違いを反映して分布範囲が異なる。



## 4 オホーツク文化・擦文文化、古代国家からのまなざし



18-1 オホーツク・擦文文化と古代国家

古代国家が編纂した奈良時代の歴史書である『日本書紀』には斉明4年(658)~6年にかけて阿倍比羅夫の秋田から北海道南部にかけての航海の記事がある。「渡嶋蝦夷」「肅慎」の記載があり、阿倍比羅夫が「渡嶋蝦夷」を助けて「肅慎」と戦った記録が残る。「渡嶋蝦夷」は擦文文化を担った人々、「肅慎」はオホーツク文化を担った人々と考えられる。さらに『日本書紀』には「都岐沙羅柵」(斉明4年)など漢字表記によるアイヌ語地名と推定される記載がある。

このように古代国家は、都から遠く離れた北の大地において、本州とは異なった独自な特徴をもつ二つの文化が存在したことを明確に認識していたのである。

本州中央(畿内)では飛鳥時代後半(7世紀後半から8世紀初め)に古代国家が成立する。

古代国家はオホーツク文化・擦文文化をどのように見ていたのであろうか。

擦文文化の遺跡からは銭貨、蕨手刀、鍔帯金具、須恵器など、オホーツク文化の遺跡からも銭貨、蕨手刀、金銅装の刀剣、須恵器など、本州から持ち込まれた資料が出土する。

銭貨は皇朝十二銭と呼ばれ、古代国家が铸造した。蕨手刀は生産地がはっきりとしないが、奈良の正倉院にも同じものがある。鍔帯金具は古代国家の役人のベルトの飾金具である。



(参考) 18-2 蕨手刀 千歳市ウサクマイ遺跡  
8世紀 長51.0cm 国立歴史民俗博物館蔵



(参考) 18-3 蕨手刀 千歳市ウサクマイ遺跡  
8世紀 長58.0cm 国立歴史民俗博物館蔵

An ancient nation was established in central Honshū (Kinai) during the late Asuka period (late 7th to early 8th century). How did this ancient nation view the Okhotsk and Satsumon cultures?

Excavations that relate to the Satsumon and Okhotsk cultures revealed items that have to have been brought from Honshū. Those include coins, Warabi-te swords, metal belt accessories, and Sue pottery. All of these show a strong connection with the ancient nation on Honshū.

Beyond that, the Nihon Shoki, a compilation of Japanese chronicles made in the ancient nation of the Nara period (710–794), mentions the "Watarishima Emishi" and the "Ashihase". We know that the "Watarishima Emishi" were the people of the Satsumon culture, and that the "Ashihase" were the people of the Okhotsk culture. Furthermore, the Nihon Shoki mentions places with Ainu-names written in Kanji (Chinese characters).

The ancient nations on Honshū clearly recognized two cultures in the northern lands that had their own, unique characteristics.



コラム

## オホーツク海沿岸にもたらされた 古代国家からの搬入品

オホーツク海に沿った宗谷岬から根室半島にかけてのオホーツク文化の遺跡では、本州から持ち込まれたと推定される遺物が出土する。

知床半島に位置する斜里町チャシコツ岬上遺跡<sup>しやり</sup>では、皇朝十二銭のひとつ「神功開竇」<sup>しんこうかいほう</sup>(天平神護元年=765～)が出土している(19-1)。これまで北海道中央部の石狩低地帯の擦文文化の遺跡からも「和同開珎」(和銅8年=708～)など十数点の皇朝十二銭の出土は知られていたが、それよりもはるかに離れた地での出土例となる。また、オホーツク海沿岸でも、やや北寄りに位置する枝幸町目梨泊遺跡<sup>えさしめなしどまり</sup>では、多くの蕨手刀をはじめとして刀剣類が出土した(19-3)。加えて、近年は本州でも類例の少ない精緻な文様を施した金銅装直刀<sup>ちよくとう</sup>が出土した(19-2)。

このような遺物はどのように持ち込まれたのであろうか。東北地方北部、擦文文化を介してオホーツク文化にもたらされたとする解釈が一般的であるが、私は、江戸時代の交流の様相などから、日本海から宗谷岬をまわり、オホーツク海という海上ルートによる古代国家からの直接搬入の可能性もあると考える。それだけ古代国家はオホーツク文化が展開した北の地域に関心をもっていた。一方、これらの遺物は地域においては古代国家の存在を意識させるものであった。



(参考) 19-1 神功開竇 チャシコツ岬上遺跡  
8世紀 径2.5cm 斜里町立知床博物館蔵・  
佐藤雅彦氏撮影



(参考) 19-2 金銅装直刀 足金具 幅6cm  
目梨泊遺跡 9世紀 枝幸町教育委員会蔵・  
写真提供



(参考) 19-3 蕨手刀  
目梨泊遺跡 8世紀  
上が長73.7cm 下が  
長68.6cm 枝幸町教  
育委員会蔵・写真提供

## 5 それは地元の熱意からはじまった -常呂実習施設の50年-

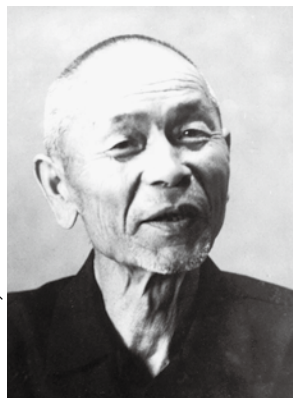
東京大学常呂実習施設は北見市常呂町で考古学の調査研究を50年以上続けてきた。きっかけは常呂町在住の大西信武氏による調査の必要性の訴えである。それを受けて発掘が始まった後も地元からの支援は続き、施設が整備された。長期にわたる調査の成果は、北海道とその北方地域の考古学研究に大きな進展をもたらした。

現在は発掘実習等の教育に加えて、企画展示や公開講座、文化財保護への協力など、地域と連携した活動を推進している。



20-1 駒井和愛(1906-1971)

東京大学文学部考古学研究室の教授であった駒井は、常呂の遺跡の調査を切望する地元の大西信武の求めに応じるかたちで、1956年に常呂を訪れる。その場で遺跡の重要性を理解した駒井は、翌年から常呂での発掘調査を開始した。この年以來、考古学研究室による調査が毎年継続されてゆくこととなる。



20-2 大西信武(1899-1980)

1924年から常呂に住んでいた大西は、土木工事の仕事に携わるなかで貝塚や竪穴群の存在を知り、調査の必要性を各所に訴えたが、門前払いに近い扱いを受けていた。1955年、大西はアイヌ語の方言調査のために常呂を訪れていた言語学研究室教授の服部四郎のもとを訪れ、考古学者を呼ぶことを依頼する。この訴えを聞いた服部が駒井に連絡し、考古学の調査が実現した。



20-3 1968年の常呂実習施設 旧研究棟(写真右)・常呂資料陳列館(中央奥)・旧学生宿舎(写真左、建設中)。

常呂町(現在の北見市常呂町)が1965年に建設した「常呂町郷土資料館」(旧研究棟)に、1967年から助手を派遣して「常呂研究室」を開設した。これが常呂実習施設の始まりである。続いて常呂資料陳列館と学生宿舎が建設されて本格的な活動が始まった。その後、建物の老朽化に伴い、学生宿舎は2003年に新築され、研究棟は2013年に北見市の「ところ埋蔵文化財センター」内に移転している。

### 21-1 窪みで残る竪穴群(史跡常呂遺跡)

常呂町内には、縄文時代から擦文文化までの竪穴住居の跡が、現在でも埋まりきらず窪みとして残っており、その数は3000基を超える。これらの竪穴全ての測量調査を1970年までに完遂し、その数や位置、形状を正確に把握した。この成果は道内各地に残る竪穴群の調査のモデルケースとして高く評価されている。



### 21-2 オホーツク文化の竪穴住居の発掘調査

施設名に冠された「北海文化」を象徴するのがオホーツク文化である。その調査研究は施設の重要な活動テーマの一つである。この文化の遺跡の発掘は、常呂での調査開始より前、1947年からの網走市モヨロ貝塚を皮切りとして、1960年代と1990年代末から現在に至るまで行われている。

(写真は2005年に行われたトコロチャシ跡遺跡10号竪穴の調査)

### 21-3 文学部夏期特別プログラムによる実習(土器接合作業の体験)

現在の常呂実習施設では、考古学の実習に加えて、博物館学実習や各種体験プログラムなど、北海道での体験を核とする教育プログラムが開講されている。また、近年では地域連携活動にも注力しており、文化財の保護活用への協力、公開講座の実施など、地元北見市との連携を深めている。



## おわりに

5世紀から始まったオホーツク文化の南下は、縄文時代早期の「石刃鍬石器群」の南下以後ほとんど途絶えていた大陸と北海道の北回りの交流を、およそ7000年ぶりに復活させた。これが列島の人類史に与えたインパクトはきわめて大きなものであった。

一方、7世紀後半に擦文文化が成立した背景には、東北地方の蝦夷を支配地に組み込もうとする本州の古代国家の動きが大きく関わっていた。8～9世紀の北海道では、これら北と南からの二つの勢力が拮抗し、文字どおり「並立」していたのである。だが、おそらくは東北地方北部の発展を契機とした南の勢力の拡大を受けて、道内のオホーツク文化は擦文文化と融合する道を選択し、次第に吸収されてゆく。

古代に相当する時代の北の大地、北海道で生じていたこのダイナミックな動きは、昨今では東アジアの広域的な政治社会史の観点から評価され、研究が進展しつつある。東京大学常呂実習施設で半世紀以上にわたって継続されてきた調査研究もその一角を担っている。今回、日本の歴史と文化を展示する博物館をもつ大学共同利用機関である国立歴史民俗博物館でその成果を提示することによって、さらに広く、かつ様々な視点からこれら東北アジアの文化への理解が広がることを期待したい。



22-1 湧別町シブノツナイ竪穴住居群

530基の竪穴が窪みで残る(北海道指定史跡)。

In what is equivalent to the ancient era (7th – 12th century) of Hokkaido, the two distinct Okhotsk and Satsumon cultures existed side by side. The Okhotsk culture was rooted in further northern regions, and the Satsumon culture was influenced by the ancient nations of Honshū. As such, the history of Hokkaido during this period needs to be studied and understood from the broader perspective of East Asia as a whole.

This feature exhibition focuses on the findings made by the University of Tokyo's Tokoro Research Laboratory, which has been conducting archaeological research on Hokkaido's history for more than 50 years. By exhibiting the dynamic social movements that occurred in Hokkaido during the period corresponding to ancient times at the National Museum of Japanese History, which conducts comprehensive research on Japanese history and culture, we hope to provide an opportunity for many people to understand Hokkaido's history from a broader perspective.

〈挿図の出典〉

11-1 北見市とところ遺跡の森作成の図を一部改変

15-2 榊田朋広2016『擦文土器の研究』北海道出版企画センターの図211を改変

18-1 平河内毅2018『第4章第3節 大陸や本州との関係性』『チャシコツ岬上遺跡 総括報告書』斜里町教育委員会 第90図を一部改変

## オホーツク文化・擦文文化を知るためのブックガイド

菊池俊彦2009『オホーツクの古代史』（平凡社新書）平凡社  
工藤雅樹2005『古代蝦夷の英雄時代』（平凡社ライブラリー）平凡社  
瀬川拓郎2007『アイヌの歴史 海と宝のノマド』（講談社選書メチエ）講談社  
高瀬克範編2023『季刊考古学・別冊42 北海道考古学の最前線』雄山閣出版  
長沼 孝・越田賢一郎ほか2011『新版 北海道の歴史 上 古代・中世・近世編』北海道新聞社  
野村 崇・宇田川洋編2003『北海道の古代② 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社  
野村 崇・宇田川洋編2004『北海道の古代③ 擦文・アイヌ文化』北海道新聞社  
西秋良宏・宇田川洋編2002『東京大学コレクションXⅢ 北の異界 古代オホーツクと氷民文化』  
東京大学総合研究博物館  
藤本 強2009『市民の考古学⑦ 日本列島の三つの文化』同成社  
袁島栄紀2015『「もの」と交易の古代北方史』勉誠出版  
横浜ユーラシア文化館・東京大学常呂実習施設編2021『オホーツク文化－あなたの知らない古代－』横浜ユーラシア文化館・大阪府立近つ飛鳥博物館

### 展示プロジェクト委員 (◎は代表)

◎林部 均  
(国立歴史民俗博物館研究部考古研究系教授)  
村木二郎  
(国立歴史民俗博物館研究部考古研究系准教授)  
熊木俊朗  
(東京大学大学院人文社会系研究科教授)  
太田 圭  
(東京大学大学院人文社会系研究科助教)

### 展示協力

枝幸町教育委員会／北見市ところ遺跡の森／斜里町立知床博物館／根室市歴史と自然の資料館／北海道映像記録(株)／アルト・ヨアヒム／猪熊樹人／國木田大／佐藤雅彦((有)写真事務所クリーク)／高阜孝宗／中村雄紀／箱崎真隆／矢嶋めぐみ

総合展示第1展示室 特集展示

## 北の大地が育んだ古代 -オホーツク文化と擦文文化-

発行日 2023年11月14日

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設  
〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376 電話 0152(54)2387  
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国立歴史民俗博物館  
〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117 電話043(486)0123(代表)

印刷 株式会社 エリート情報社

東京大学文学部「人文学における国際的・地域・社会連携の推進」プログラム関連事業







北見市常呂町

〒093-0216  
北海道北見市常呂町字栄浦376  
TEL 0152-54-2387  
※電話でのお問い合わせは、平日の  
9:30～16:30  
開館時間：9:00～17:00  
休館日：火曜日(休日の場合は開  
館)・年末年始



千葉県佐倉市

〒285-0017  
千葉県佐倉市城内町117  
TEL 050-5541-8600(ハローダイヤル)  
開館時間：3月～9月/9:30～17:00・  
10月～2月/9:30～16:30  
休館日：月曜日(休日の場合は翌日休  
館)・年末年始(12月27日～1月4日)



東京大学大学院人文社会系研究科附属 北海文化研究  
常呂実習施設・常呂資料陳列館



東京大学文学部「人文学における国際的・地域・社会連携の推進」プログラム関連事業



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国立歴史民俗博物館  
National Museum of Japanese History

